ＩＩＡＳ「ゲーテの会」ブックレット
（VOL. 01012）

未来社会はいかにあるべきか
－ 人類の未来と幸福を考える －

（思想・文学分野）

和魂洋才の末路

公益財団法人国際高等研究所
＜「新たな文明」の萌芽、探求を！＞プロジェクト

本ブックレットは、2014 年 7 月 11 日開催の第 12 回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。
※本ブックレットの無断転載・複写を禁じます。ただし、個人としてのご利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

未来社会はいかにあるべきか

－ 人類の未来と幸福を考える －

和魂洋才の末路

今日、われわれは、原発/脱原発、グローバル化/脱グローバル化、成長/脱成長などにおいて決定不能に陥っている。西洋発の近代文明は限界を向かえ、それに追従してきた日本の近代化も追従すべきモデルを失っている。日本の近代は「和魂洋才」を唱え、「和魂」のもとに西洋近代文明を受容しようとしたが、その帰結は「無魂洋才」というべきものになってしまった。西洋の技術や制度、思想はあくまで西洋の土壌（キリスト教やギリシャ的精神）に基づいていることをわれわれは忘れている。では日本の精神的土壌はどこにあるのか。それを、西田哲学を参照しながら考えてみたい。

佐伯　啓思（Keishi SAEKI）

1949 年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。

政治学、経済学、社会学、思想史などから得られた知見を総合して、現代社会の様々な問題を論じる。とりわけ、経済のグローバル化と国家の関係、また、それらを支える、自由やナショナリズムなどの思想について考察する。

著書に『アダム・スミスの誤算』（中公文庫 2014 年）、『ケインズの予言』（中公文庫 2014 年）、『正義の偽装』（新潮新書 2014 年）、『日本の宿命』（新潮新書 2013 年）、『反・幸福論』（新潮新書 2012 年）、『経済学の犯罪』（講談社現代新書 2012 年）、『現代文明論講義』（ちくま新書 2011 年）、『日本という価値』（NTT 出版 2010 年）、『大転換』（NTT 出版 2009 年）、『日本の愛国心』（NTT 出版 2008 年）などがある。

目次

はじめに

Ⅰ　社会科学への疑問
（１）　経済学や政治学が世の中を混乱させ、不安定にしている
（２）　西洋的な科学の考え方の限界

Ⅱ　「和魂洋才」と西田哲学
（１）　セルフ・アイデンティティを失った日本
（２）「和魂洋才」を否定した西田哲学
（３）　西洋の哲学と「純粋経験」の違い
　　①　「我思う、ゆえに我あり」：デカルトが示す西洋の哲学
　　②　「純粋経験」：西田幾多郎の哲学
（４）「無」から生まれ、「無」に戻る

Ⅲ　西田哲学が導く日本人の論理
（１）世の流れを「運命」として受け止める
（２）「私」を捨てて「私」を生じる

2016 年 7 月 11 日開催
第 12 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」
テーマ：和魂洋才の末路
講演者：佐伯 啓思（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

（文中敬称略）

はじめに

私の専門は何かと問われると少し困ってしまうが、他と比較してより研究してきたのは経済学や政治学等の社会科学、もしくは社会思想である。しかし、このような場で社会科学について話をしてもおもしろくないので、むしろ、現代文明などについて、素人の目線から話をさせていただければと思っている。

Ⅰ　社会科学への疑問

（1）経済学や政治学が世の中を混乱させ、不安定にしている

今も述べたように、私は社会科学を研究してきたが、40 歳過ぎ頃から経済学や政治学等、社会科学そのものにあまり関心がなくなってきた。それには様々な理由があるが、一つは、経済学や政治学等がかえって世の中をおかしくしているのではないかという気がしはじめたということである。

例えば、経済学は、基本的に市場競争によって万事上手くいくと考えるので、どうしても競争に勝てるような競争条件を作っていこうとする。小泉純一郎元首相の徹底した構造改革政策などがそうである。しかしそれが本当に世のなかを良くしたかとなると、難しい。

政治学の方は、民主主義でやればうまくいく。国民の民意が政治に反映すれば政治はうまくいくので、政治と民意の間にある様々な障害物を取り除いていくことを求める。しかし、それで本当に政治が良くなるかというと、そうともいえない。

実際、それを行った結果が今日の世のなかである。市場競争は国家を越えて広がり、いわゆるグローバル経済が出来上がり、海外企業とも熾烈な競争をしなければならなくなった。安倍晋三元首相も、アベノミクスで日本経済を立て直すといい、そのためにお金をジャブジャブ注ぎ込むようになっている。

民主主義も、世界中が民主主義国になれば世界秩序ができるという楽観的な考えが強く、アメリカなどは、中東イスラム圏まで民主化しなければならないと考えている。民主化していないから独裁政権が生まれて、石油価格を操作したり、供給を不安定にしたり、勝手なことをするようになったと思い、「これは怪しからん。中東諸国も民主主義に変わった方がよい」という考えが支配的になっている。

しかし、その結果、どうなったかというと、中東は大混乱に陥り、むしろ、下手に選挙をすると強力なイスラム原理主義政党が勝利するという、妙な事態になってしまった。アメリカにとってもこれは誤算である。つまり、世界を民主主義にしてしまえばうまくいくというような、そういう簡単な話ではない。むしろ、民主主義にしたために世界が混乱している面もかなりある。

市場競争も、グローバル化したのはよいが、あまりに競争が激しくなったために、普通の労働者もたとえば新興国の安い労働力と競争しなければならなくなった。そうなると、日本は賃金を下げなければならなくなる。その結果、デフレ経済になるので、大変な事態になったとお金をどんどん出す。そのお金は世界の金融市場へ流れて、投機に回されたり、株が乱高下したりして、われわれは一喜一憂する。このように経済全体が不安定になるのは、決して望ましい状況とはいえない。

つまり、経済学が「市場競争をやれば皆が幸せになる」といったために、このような事態が出現したともいえるし、政治学が「民主主義にして民意を全部吸い取れば政治はよくなる」といったために、世界中が混乱に陥っているという面もある。もちろん全部ではないが、そのような面も決して無視できないということである。

それに対して、今の社会科学では、経済学も政治学も答えを出していない。では、他のやり方があるかというと、それも見つからない。どこが問題なのかもよく分からないのである。明らかなのは、現実のグローバルな市場競争が資源獲得や市場獲得で非常に激しい競争に入ってしまったということであり、民主主義の政治は、多くの国でかえって政治を不安定化している、ということである。現実が、学問通りになっていない。これは事実である。

また例えば、最近、問題になっている STAP 細胞も、研究した女性の特異なキャラクターなど、いろいろな問題はあるが、一つには先端的な科学技術で世界のトップに出なければ、その国の産業技術が発展しない、あるいは、その産業技術の基盤ができないという背景があり、そこで非常に激しい競争が起きている。

しかも、それに対して巨額のお金が付く。STAP 細胞が仮にうまくいって、特許を取得して、世界中で使用されれば巨額のお金が入ってくる。アメリカなどは、こうした先端医療を一つのビジネスモデルにしている。そのため、学術、科学技術、科学研究、技術開発研究という基本的な学術的分野まで、マーケット競争、グローバル競争の原理が持ち込まれ、早く結果を出さなければならないという状況に置かれている。成果を出すために雇われている多くの研究員は 1 年～3 年くらいの契約で雇われているので、その間に成果を出さなければならないという事態になっている。われわれの大学でも、そのような傾向が日に日に強くなっている。

そのように考えると、市場競争でやれば万事うまくいって、万人が幸福になる、あるいは、民主主義でやれば政治がよくなるというような近代社会の考え方は、もう限界に来ていて、その先に進むことができない状態になっているのではないだろうか、そう強く感じるようになった。それが 40 歳頃のことである。

（2）西洋的な科学の考え方の限界

その頃から、私は社会科学そのものが問題をつくり出しているのではないかと考えるようになった。この場合の社会科学は、西洋が生み出した近代的な科学の考え方で、それを社会にも応用することで、世界中に通用する普遍的な考え方が可能だという思想に基づいている。科学の普遍性という考え方は特にアメリカが強く打ち出しており、科学的な論理は日本でも、インドでも、中国でも、世界中で通用するはずだと考える。したがって、この原理を世界に拡散すれば、世界を覆うグローバルな画一的世界が出来上がることになる。そこで、前述の「市場競争がうまくいく」という命題は普遍的原理であると経済学者は考える。つまり、「グローバル市場」をつくれば万事上手くいくという話になってしまう。

しかし、実際にやってみるとそのようにはいかない。国によって市場のあり方はバラバラであり、国のあり方や多様性は無視できない。

そうなると、このように特にアメリカが中心となって唱えられる近代社会の原理、つまり、科学技術をベースにした産業発展や経済の活性化、それを市場原理によって世界化するという考え方が問題なのではないか。さらに政治の方でいえば、民主主義を確立することで、世界的に一つの共通原理による政治体制を確立するという近代社会の原理そのものがおかしくなっているのではないか。40 歳頃からそういうことを考えるようになった。それは今も私自身の関心である。

もう一つは、そのなかでも日本は酷すぎるということである。日本はグローバル経済のなかにあって、先進国のなかで一番失敗している。日本では 90 年代以降、政治改革が強く叫ばれ、民主主義の進展、特に民意の実現が唱えられた。官僚主導の弊害も唱えられた。政権交代も唱えられた。では、自民党から民主党政権へ代わって政治が良くなったのかというと、全く良くなっていない。

そういう状況を見ると、本当に日本人は、アメリカと同じように市場競争をよしとしているのか、あるいは、民主的政治を納得できているのかと疑問に思う。何か根本的な価値観が違っている。日本人の根本に合わないものを持ち込んでいるのではないかという思いが強くなってくるのだ。

例えば、3 年前に東日本大震災があって、原発事故が起きたが、その後、原発にどう対処するかについてはほとんど判断不能な状態に陥っている。賛成派も反対派も強い論拠はない。反対派は多聞に情緒的に「あんなに危ないものは嫌だ」という話をするし、賛成派は「今原発をやめたらグローバル競争に生き残れない」「中国は次々に原発をつくっているではな

いか。あれとどう競争をするのか」という話をする。これらは全部、主体的に決めている話ではない。

これがたとえばアメリカなどで起きた問題であれば、彼らは「科学技術に事故はつきものだが、人間はそれをコントロールしなければならない。自由や幸福の拡大のためには、危険なものも使いこなさなければダメだ。そのためにはもっと高度な技術をつくればいい」と考えるであろう。もちろんアメリカにも反対する人はいる。ヨーロッパは多様で、ドイツなどは原発反対派が力を持つが、ドイツはフランスから電力を買えることをある程度前提にしている。

原発賛成、反対のどちらがよいのかという話を別にして、日本では、どうも確信のある議論ができなくなってしまっている。判断の確かな基準を作ることができない。グローバリズムに対しても、日本はどのような立場に立てばよいのかよく分からない。TPP 問題にしても同様である。軸が見えなくなってしまっている。つまり、日本は日本人の価値観で判断することができなくなってしまっているのである。そのようなところに、今、われわれが抱えている問題があると思う

Ⅱ　「和魂洋才」と西田哲学

（1）セルフ・アイデンティティを失った日本

これは少し長い目で見ると、今に始まったことではなく、明治以降、日本の近代化が行き着いたところではないかという気がする。残念なことに、非常に厄介な問題だ。

ご存知のように、明治維新で日本は開国したが、あの時の日本の最大の課題は、列強の植民地にならずに国の独立を保つことだった。そのためにはどうすればよいかというと、西洋並みの強国にならなければならなかった。西洋が強いのは、文明の程度が高いからである。文明の高さは、福沢諭吉がいうところの合理的な科学的精神と自由な議論に表れる。自由な議論をしながら、それを政治に反映する。多事争論である。そして、マスコミが重要な役割を果たす。このような自由な議論が、人民の自立の気風をやしなう。それをわれわれは学ばなければならないと、福沢諭吉はいっている。それを学んだ上で、西洋に追い着かなければならないのである。

念のためにいうと、福沢諭吉は西洋主義者ではない。彼自身は「西洋追随はだめ」「西洋心酔はだめ」「我々の本当の目的は日本の独立にあり、そのために西洋的なものを使えばよい」といっている。明治には、このような考え方の人が多かった。一言でいえば「和魂洋才」である。「和魂洋才」で日本の危機を乗り切ろうとしたのである。西洋発の科学は、客観的で普遍的な面を持つから、それが中心になって近代文明をつくりだした。したがって、日本もそれを一種の技術として導入すればよい。つまり、「才」として使うことができる。しかし、「魂」は日本人のそれでなければならない。日本の「魂」を持ちながら、西洋の技術を上手く使うという考え方である。明治の人たちは基本的にそのようなやり方をよしとした。

ところが、それでうまくいったのかというと、確かに日本の近代化は進んだが、にもかかわらず、決してうまくいかなかった。典型的なのは、夏目漱石のような人である。彼は当時の日本でももっとも英語に達者な人物で、多量の英文の書籍を読み、イギリスへ行ったが、ノイローゼになって帰国した。帰国後、しばらくたってからの講演でもこういうことをいう。「日本は西洋のまねばかりしていてはだめだ。近代文明は人間が労力を節約するために、たとえば自転車をつくり、自動車をつくり、汽車をつくり、いろいろな便利なものを発明してきた。それは人力というエネルギーを節約するためである。ところが、いつの間にか、それをつくるためにあくせく働いて、そのために時間を使い、もの凄く忙しくなっているではないか。これはおかしい」と述べている。

西洋の場合は、彼らの内発的な欲求でそういうものをつくり出してきたが、日本人は内発的な欲求ではなく、西洋がつくっているからまねようとして、その後を追いかけている。西洋は内発的開花だが、日本は外発的開花である。ところがこれによって日本人は、セルフ・アイデンティティを失ってしまい、外国から様々なものを導入するのに精一杯で、その上を大急ぎで上滑りしつつ、気がつくと皆が神経衰弱になってしまった。漱石はそのような話をしている。

ではどうすればよいか。漱石自身も「答えはない」と講演のなかでいっているが、それでも、この問題を日本人はきちんと考えなければならない。彼自身も、「自己本位」といってみたり、最後は「則天去私」という禅のようなものに救いの境地を求めたりしたが、あまりうまくいかなかったように思う。

（2）「和魂洋才」を否定した西田哲学

これは近代日本の非常に大きな課題で、ここに一つの問題がある。まず、西洋が近代社会の原理として生み出した合理的な科学や、自由な個人、個人の権利、それに基づく民主主義というものが、果たして本当に普遍的なものなのかということがある。もしかすると、これは西洋文化のなかでしか生まれなかったものではないかという気もする。

そのような問題を哲学の問題として真正面から考えようとしたのが、西田幾多郎であり、西田哲学であった。私も、関心があって自分流に西田幾多郎の著書をあれこれ読んだりした。しかし、まずは、超難解な文体で、何をいっているのか分からない。しかし、西田幾多郎がしようとしたことはよく分かる。

西田幾多郎（1870 年－1945 年）
Public domain, via Wikimedia Commons

彼はある論文で、和魂洋才を否定している。彼は

「和魂漢才」という言葉を使い、「和魂漢才はだめだ」といっているが、これは「和魂洋才」といいかえてもよい。それは先に述べた「市場競争はよい」とか「民主主義は立派」とか「人権思想の普遍性」などの話が、全部ヨーロッパの近代科学精神、文化のなかで生まれてきたものであり、しかもその背後にはキリスト教や古典ギリシャ哲学がある。それはヨーロッパを知らないと理解できないものであるから、それを簡単に日本へ持ち込んでもだめだということになる。しかし同時に、それらをきちんと勉強して知っておかなければならないことも事実である。西洋の思想を徹底的に知った上で、日本は日本の文化や思想、日本人の精神などを基礎にして、どのようにして日本の哲学や思想をつくることができるのか、そのように考えなければならないというのが西田幾多郎の基本的な考え方であった。

西田幾多郎は、西洋哲学に関しても大変よく勉強をして、ギリシャから最新のものまで重要なものは全部読んでいる。読んだ上でそういっているのであり、素人が知識もなくいっているのとはまったく違う。それを知った上で、「このようなものはやはり西洋の文化のなかでしか出てこない」と考えたのだろう。

論理は誰でも普遍的だと思っている。「私は学者である」というような簡単な文章は、何処でも通じる普遍的な意味を持っているとわれわれは考えているが、考えてみれば、この場合の「学者」という言葉で表される意味は国によって違う。そう考えれば、「西洋の論理は西洋の文化のなかでしか理解できない。日本の論理はそれとは違う」ということにもなるだろう。したがって、簡単に「私は学者である」といって、それが普遍的だともいえない。普通、われわれはこういう簡単な文章にしても、論理にしても普遍的に流通すると考えるが、西田幾多郎の考え方ではそのようなことは簡単にいえないのである。

（3）西洋の哲学と「純粋経験」の違い

西田幾多郎がいっていることは非常に難しくて短い時間で説明できないが、私なりに説明するならば、彼は若い頃から苦労をした。東京帝大には行くけれども本科の学生ではなく、専科、今でいえば研究生だった。そのため二流の扱いで、図書館もまともに利用できなかった。40 歳で京大へ来た頃はまだ何の業績もなかったので、そのような西田幾多郎を呼んだ人も偉いと思う。そして、西田幾多郎は京大へ来た翌年に有名な『善の研究』という本を書き、非常に有名な「純粋経験」というキーワードを生み出す。

①　「我思う、ゆえに我あり」：デカルトが示す西洋の哲学

西洋の哲学、一般的に近代哲学はデカルトから始まったといわれるが、デカルトといえば「我思う、ゆえに我あり(Cogito, ergo sum)」という言葉で有名である。彼は当時のたいへんな秀才で、勉強家だった。ありとあらゆる本を読んだが、本を読んでもどうも世界について納得を得られない。そこで、本を全部捨てて、ヨーロッパ中を旅行する、あるいは従軍兵士としてあちこちへゆく。17 世紀のヨーロッパは宗教戦争をしている最中であり、ヨーロッパ各地で悲惨な状況を見聞したデカルトは「自分が勉強してきたことは何だったのか」

「自分は何も知らない」という絶望感に陥る。そして、あらゆることが信じられなくなったデカルトは、田舎で暖炉の火を見ていた時にふと「自分は何も信じることができないが、すべてを疑っている自分がいる。すべてを疑っている自分がいることだけは確かである。それは絶対に疑えない」と思いつく。それが彼の立場である。そこに例の「我思う、故に我あり」「我疑う、故に我あり」という考え方が出来上がった。

ルネ・デカルト（1596年－1650年）
Public domain, via Wikimedia Commons

「我あり」とは「我」という存在の絶対性を確信したということで、世の中の万物はすべて疑わしいが、「我」だけは、世界から独立し、世界を超越して確かにあるということを意味している。この「我」とは、フランス語を話す、若干ブ男のデカルトのことではない。それは一つの精神であり、抽象的な理性を指している。推論する、ものを考える精神、理性を彼は「我」といっている。それはこの世のなかを超えており、自分の体つきとは無関係である。足が速いとか、遅いとか、病弱であるとか、そういうことと関係なく、世界から離れて超然としてある。

そのような「我」というものを西洋は立てて、その「我」＝精神から始まり、精神がこの世界を分析し、世界を合理的に理解する。そして、世界のなかには一つの秩序があり、それを理性で捉えることができると考える。人間の感覚に頼ってはダメである。そこから近代科学が始まり、合理的な考え方が始まり、その科学が社会に応用されて社会科学も始まるようになる。

しかし、考えてみると、この考え方は西洋文化、少なくともキリスト教文化と密接に関係している。キリスト教は世界を創造した神を想定する。つまり、神は世界から超越しており、世界を創ったと同時に世界を完全に理解している。だが、人間は神ではなく、神の被造物である。ただ、人間の肉体は死んで無くなるが、理性、精神は、人間の肉体を離れているから永遠のものであり、神に近づくことができる。神にはなれないが、神に近づくことはできるのである。それにより、精神は、この世界から超然として、あたかも神の代理人であるかのように、この世界を分析することができる。それは、いいかえれば、もし神がこの世のなかをある秩序をもって創造したとすれば、人間は理性によってそれを分析することができるということで、これが西洋の合理主義という信念をもたらした。もちろん西洋といってもいろいろな面があるので、それに対して反対する人たちもいるが、メインストリームはそうなっている。そうすると、世界を超越し超然とした抽象的な精神、理性が見出したものは、日本人であろうと、インド人であろうと、中国人であろうと理解できるはずである。

②　「純粋経験」：西田幾多郎の哲学

しかし、西田幾多郎はそのような考え方をしていない。その考え方はまだ十分ではない。

デカルトは火を見て「そうか」と思いついた時、「我思う」などと考えていない。「我思う」という「我」はその時にはなかったはずである。そこにあるのは、火を見て「そうか」と思った、火と一体になったその「経験」だけだと、西田幾多郎は考える。経験だけが根本にあって、後から「あの時、自分(我)はあのように考えた」「自分(我)はこのように思った」と反省し、そこで初めて「我」が出てくるのである。根源的に「我」があって、自分が暖炉の前で何かを思いついたのではない。むしろ、火に魅入られた時に何かを感じたという経験だけが、根本的な事実である。それを西田幾多郎は「純粋経験」といっている。すべてそこから説明できるはずだというのが西田哲学である。

この考え方は、西洋の考え方とはかなり違う。最初からこの世のなかを超越してしまった「私」がいるのではない。火に出会った私がおり、その次に暖炉から離れて外へ出て、冷えた空気に触れて「寒い」と思った私がいる。そして、もう少し向こうには戦場があってバタバタと人が死んでいる。その悲惨さを見て「大変なことが起こっている」と感じた「私」がいる。しかし、まずあるのはこうした「経験」だけで、経験している「私」は後からでてくる。この「経験」だけが現実をつくっているということである。

人間は常にそのような経験をしながら、経験のなかで動いている。そうであるならば、この世界の外に出て、世界を外から眺める主体など立てることができない。人間というのは常に世界のなかにあって、何か経験をしながら、その経験に突き動かされ、いろいろなことを感じている。その経験に突き動かされて、また次の行動をするのである。そのようなものの連鎖が、この世の中をつくっているということになる。

そこから、西田幾多郎は次のような考え方を打ち出した。

一つは「超越的な私」のような主体は存在しないので、抽象的、科学的に見て「客観的に正しい」というようなことは簡単にはいえない。そのようなことが出てくるのは、キリスト教など西洋の文化的背景を前提にした場合である。しかし、日本には少なくともキリスト教的な「神」の概念がない。日本人は歴史のなかで、この世のなかに生れ落ち、この世のなかから去って行く。どこから来て、どこへ去って行くのかはよく分からないが、この世のなかで生活し、この世のなかで人と出会い、そして去って行くという考え方が日本人には強い。

しかし、西洋の場合は、元々神がこの世のなかを完璧なものとして創っているはずだった。人間は精神的存在として理性的になれば、多少は神の意図が分かってくる。すると、この世のなかを完全なものとして人間自身が創りかえることができるはずだ。そこに西洋の「科学技術によって人間は永遠に進歩する」「歴史は進歩する」という考え方が出てくる。

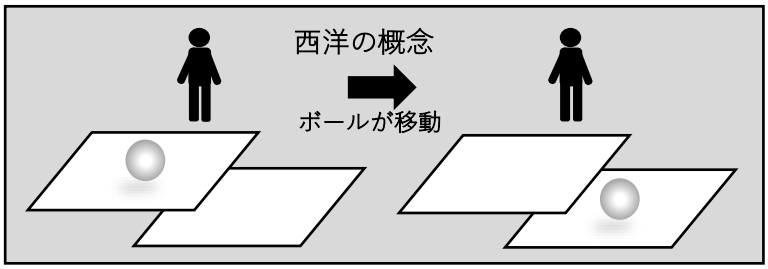
（4）「無」から生まれ、「無」に戻る

一方、西田幾多郎のように考えると、日本人には「歴史は進歩する」という発想は出てこない。たとえば 21 世紀の 2010 年代にわれわれは偶然出会っているだけであり、それも次の瞬間には消えてしまっている。このような刹那的な考え方が強い。したがって、日本人の

歴史についての考え方は物事が生々流転していく、生まれては滅して、それが流転していくという考え方が強い。

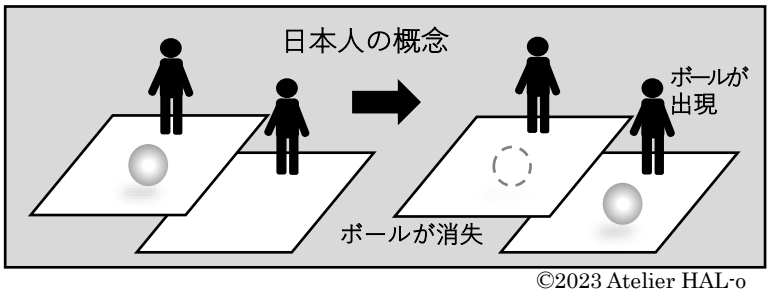
あるいは、歴史を考えた人は「歴史というのは時の勢いである」という。時勢＝時の勢いによって歴史は動いていくということである。そのようなものを外から眺めることはできない。外から眺めて、ある一定の方向に歴史をつくることもできない。誰もが時の勢いのなかで流されたり、抗ったりしているが、いずれにしても時勢のなかに人間は生存しており、その力が衝突し合ってまた次の流れができていく。結局、われわれはどこからか来て、どこかへ去って行くが、そのどこかはよく分からない。よく分からないので、それは何もないところ＝「無」であり、われわれは「無」からこの世に生まれ出て、そしてまた「無」に戻っていく。そのような考え方が日本人には強い。

例えば、四角い紙の上にボールが乗っているとする。別のところにもう一つ同じような紙があり、われわれは向こう側に立って紙の上のボールを見ている。そして、ボールがもう一つの紙に移動したとすると、西洋の考え方では、われわれは離れたところからボールが移動する様子を見ることになる。ボールは一つの実体であって、実体としてのボールが移動したと理解する。ボールは運動しているので「この運動の法則はニュートン力学ではどうなるのか」「これは秒速〇〇で動いている」というような話ができるわけである。



©2023 Atelier HAL-o

しかし、もしこの白い紙の上にわれわれもボールと一緒に乗っていて、われわれがボールに触れているとしたら、どうなるのか。ボールが移動すると、一緒に乗っているわれわれから見て、ボールはいつの間にか消えて一方に移る。もしわれわれが反対側に乗っているとすれば、何処かからボールがやって来て、目の前に出てくる。そうなると、ボールが運動したとわれわれは感じない。もしもその紙が白い紙ではなくて透明のガラスだったとすれば、いつの間にかボールは「無」のなかに消えてしまい、もう一方では、いつの間にか何もない「無」からボールが出てくるのである。



©2023 Atelier HAL-o

われわれはそのような考え方を強く持っており、西田哲学の根底にあるのもそのような考え方である。西洋のように、神がいて人間がその代理となり、神が消えてしまったとしても人間がこの世の中をよくする、歴史を一定の方向に動かせるというような考え方はしな

い。すべてが「無」から出て「無」に帰っていくという、そのような考え方をするのである。

つまり、われわれが存在する場所の根底には「無」があり、「無」がすべてを支え、すべてを受け止めていて、そのなかで偶然、その瞬間にわれわれは出会う。そのような経験がつながっていくだけである。それをわれわれは「一期一会」と表現したりするが、だからこそ、その一瞬の出会いを大切にするのである。

Ⅲ　西田哲学が導く日本人の論理

（1）世の流れを「運命」として受け止める

そのようなところからどのような態度が生まれてくるのか。

一つは「無」から出て、また「無」に戻っていくという生々流転の流れである。世の中はどのように流れていくのか分からないし、目的も何もなくただ動いている。人間はこの流れから離れて、それをコントロールすることはできないので、われわれは、どこへ行くか分からないその大きな流れを一つの「運命」として受け止める。一種の運命観である。

たまたま、われわれは戦争の時代に生まれず、平成のこの豊かな時代に生まれた。どちらがよかったかは分からないが、戦争時代に生まれていれば、このような場所で暢気な話をすることは考えられない。状況は全く違ってくる。しかし、そのようなことをいっても仕方がないし、今はこの状態で生まれたことを「運命」として引き受けるほかなかろう。だから、この状況を超えた普遍的なものの考え方や感じ方はないのであって、ものの考え方も感じ方も時代状況のなかで規定される。

戦争の時代に生まれた人も、それを運命として引き受けなければならなかった。それは一つの覚悟である。どうしようもない覚悟であり、それを「人間はもともと自由だから」「人間はもっと平等だから」というような普遍的原理を持ち出しても仕方がない。「本当はこのようになりたい」「本当はこのような生き方をしたい」「他の人はもっと自由に好き勝手をしているではないか」というような思いはもちろんあるが、それについて多少の改善はできても、根本的に時代状況を大きく変えることはできない。それは引き受けなければ仕方がないし、それには覚悟が要るのである。

（2）「私」を捨てて「私」を生じる

そのようなところから、日本人のある種の「運命」に対する従順さと、それにも関わらず、そういう運命を覚悟をもって自分のものとして、自分の生を全うし、自分の使命を見出すという考え方が日本には強くあった。それが日本人の精神性を作ってきたといえる。

しかし、そのためには「私が、私が」「俺が、俺が」という主張はできない。「俺はこのようにしたい」「俺はこのようになりたい」というような我欲を捨てなければならない。私というものを一度「無」にしなければならない。経験をそのまま受け止める、しかもできるだ

け豊かに受け止めるためには、一度、自我を殺さなければならない。そこに「無私」「無我」「無心」、神道的にいえば清く真っ白な心を表す「清明心」、儒教的にいえば「誠」など、そのような「無」の観念が生まれる。それらが日本人の心をこれまで捉えてきたのだと思う。西田幾多郎の哲学は、そのような日本人の精神の上に成り立っている。

つまり、西田哲学は、日本人が生きていくうえでのある種の価値、精神的な態度を前提にして、その上に日本人の「論理」を作っていかなければならないという。西洋の論理からすれば「私は私である」という自己同一性はセルフ・アイデンティティの基本で、主体としての私は、世界から離れて世界の何とも関係なく「私」としてあるわけだが、西田幾多郎はそうではない。「私」のあり方は、時間や場所によって違っている。だから「私」を主張するのではなく、それを一度捨てて、経験に即して経験の場で物事と一体になり、物事を豊かに経験して、そこからもう一度「私」というものが出てくるのである。したがって、「私」は一度、否定されなければならない。そのうえで、具体的な「私」に戻ってくる。「私は私でなくして私である」というのが真理であり、これが日本の論理だと西田はいう。

それでは、ここから先、何か確かな結論があるのかと問われると、結論はない。そこから先は私もよく分からない。しかし、われわれはそのような日本の論理をもう少し知っていれば、今日のグローバリズムのなかで、世界標準だといいつつ、経済競争を展開し、資金を競って獲得し、金をばら撒いて、「グローバル競争すれば世界はもっと豊かになる」とか「世界中がもっと民主化すれば世界は幸せになる」「産業技術が人をもっと幸福にする」などという考えにとらわれずに済んだのではないかと思う。

日本は日本のあり方、日本人の生き方というものをもう少し真面目に考えて、それを基礎にした経済のあり方や科学のあり方、技術のあり方を考えることかができるのではないかと思う。

本当に大事なのはその先だが、その先は皆さんに考えていただくこととして、その前提としてわれわれが心すべきことを、西田哲学を借りながら話をさせていただいた次第である。

発 行 日	2023 年 12 月 31 日
講演著者	佐伯 啓思
編集発行	公益財団法人　国際高等研究所
	<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ　大仲佐代子

ISSN 2759-0577

満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
（国際高等研究所庭園）